

1. 本計画における審議の内容について

I.都市計画段階

■ 2022.09.05 第29回政策検討部会

【目的】

○都市再生特別地区による建築物の高さの最高限度に関する審議

○施設計画における景観形成の考え方の審議

【審議の内容】

○まちづくり、都市再生貢献の方針を踏まえた施設計画（建築物の高さ）

○施設計画を踏まえた景観形成の考え方

都市計画段階

■まちづくりの方針

（拠点形成と都市再生の考え方 等）

■開発における都市再生貢献の方針

■建築物の高さの最高限度（案）

■景観形成の考え方（案）

II.設計段階

【目的】

○特定都市景観形成行為に関する審議

【審議の内容】

○施設設計段階における景観形成の方針等

設計段階①

■建築計画

- ・ 建築高さ
- ・ 外観コンセプト（高中低層部）
- ・ 外装デザイン方針
- ・ 8つの項目（貢献用途の配置計画）

■都市計画

- ・ 貢献内容の具体化

■基盤

- ・ 交通結節点の役割や機能、意義

設計段階②

■建築計画

- ・ 前回の振り返り（指摘事項に対する回答）
- ・ 夜景など具体的なシーン

■基盤

- ・ 交通広場配置計画

年度	-2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度～
政策検討部会		<div>II.設計段階</div> <div>①</div> <div>第1回(3/21)</div>	<div>②</div> <div>第2回(5月 予定)</div>		
都市計画関連 基盤関係 ※想定	<div>都市計画 審議会</div> <div>2022.09.05 第29回 政策検討部会</div>	<div>都市計画決定</div> <div>公共施設管理者同意</div>			
施設計画		<div>基本設計</div>	<div>実施設計</div>	<div>申請関係</div>	<div>着工予定</div>

8. 景観形成の基本的な考え方（関内らしさ）

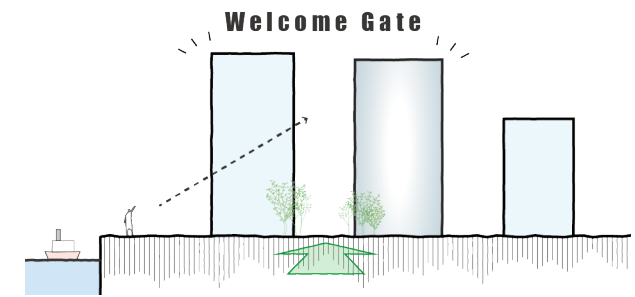
遠景 3棟の群像が関内の発展のシンボルとなり、港街関内に迎え入れる新たなゲート性を創出



関内は
世界中、全国の人々が
来訪する横浜の玄関口
当該敷地は関所「ゲート」が
存在した場所



大桟橋に向かい
「welcome to yokohama」
関内の顔は海



2つの超高層建物が
緑の都市軸と
迎え入れる文化を
継承する

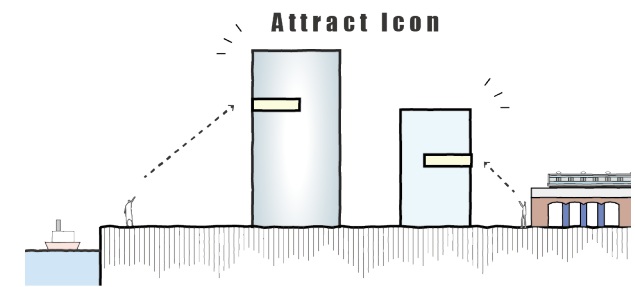
遠景 関内を際立たせるスカイロビー



港街では昔から
高台に国際信号旗を
設置し迎える船と
連絡していた



海から見える
灯台のように
港街を照らしていた



頂部や
スカイロビーが
関内を照らし
アイコンとなる

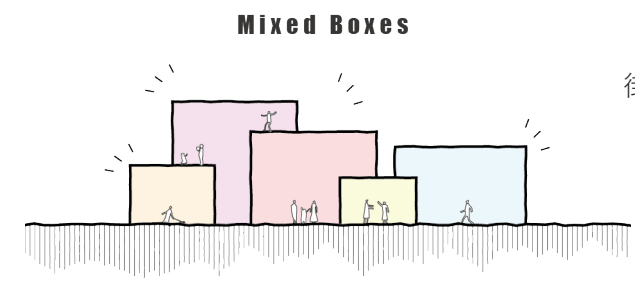
中近景 路地、小規模店舗、雑居ビル等のヒューマンスケールな界隈性の継承



裏の路地に
表を向けるお洒落な飲食店



小規模ビルが立ち並ぶ
ヒューマンスケールな
街並み

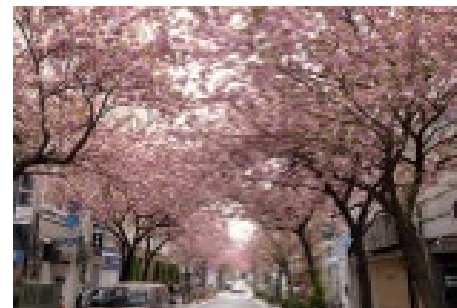


小さなスケールの
街並みを引き込むため、
店舗やミュージアム
など様々な要素を
混在させる

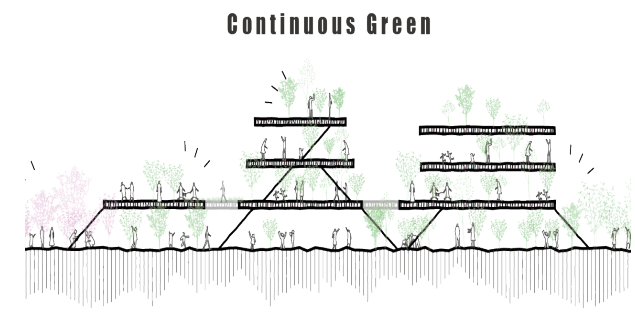
緑と広場 横浜公園、関内桜通り、日本大通等の周辺のみどりと賑わいを繋ぐ拠点を形成



横浜公園の
豊かなみどり



春に満開となる
関内桜通り



動線とみどりを
低層部に視覚化し、
歩行者レベルの
賑わいや街路樹の緑を
繋げる

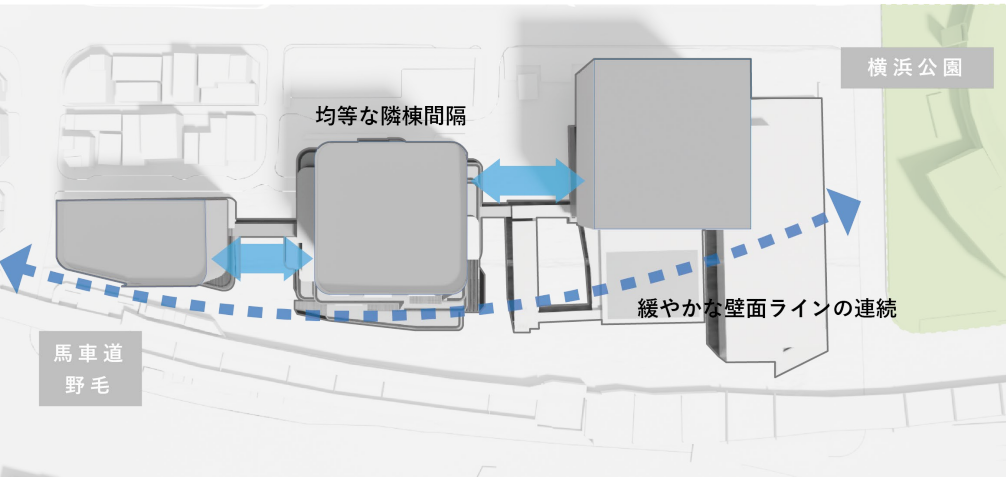
8. 景観形成の基本的な考え方

高層部のあり方		中低層部のあり方	
遠景		近景	
シンボル性と調和の創造	街並みの形成	歩いて楽しい空間づくり	
シンボル性と調和の創造（P.19） <ul style="list-style-type: none">透明感と柔らかさで頂部を統一させた群像が都市再生を印象付ける関内の新しいシンボルを形成開港の地・関所の地という歴史性から、2棟のボリュームで関内に迎え受けるゲート性を創出3棟が一体に見える適正な配棟計画で周辺と調和	関内らしい周辺の街並みとの調和（P.22-25） <ul style="list-style-type: none">旧市庁舎街区の31mラインを継承しながら、水平ラインで徐々にヒューマンスケールに落とし、馬車道などのスケールに調和低層部をボリュームで分節し、関内の街に見られる多様でヒューマンスケールな「界限性」を創出	歩行者動線（P.28-30） <ul style="list-style-type: none">ボックス配置で低層部を分節化することで、関内の特色である「路地性」と「界限性」のある歩行者動線を形成周辺の街の縦の軸と横の軸を引込み、その沿道に賑わい施設を配置し、周辺と連続した歩行者動線を形成2Fレベルのペデストリアンデッキでスタジアム、A～C街区を繋ぎ、賑わいが連続した歩行者動線形成	緑のあり方（P.33-34） <ul style="list-style-type: none">関内に見られる豊かな緑を街区内に連続させながら、立体的に配置することで、緑の拠点を形成広場や歩行者動線、デッキ等人々が活動する場に沿って緑を配置することで、人がいける場所を緑で「見える化」
			
中景			
関内と認知しやすいデザイン（P.20-21） <ul style="list-style-type: none">3棟にアイキャッチとなるスカイロビーを設置し、関内特有の象徴性を創出	関内の玄関口（P.26-27） <ul style="list-style-type: none">関内駅北口・南口へ迎え入れる顔づくり尾上町と交通広場等セントラル関内へ迎え入れる顔づくり	広場（P.31-32） <ul style="list-style-type: none">デッキを張り出し、「見る見られる」の関係のある立体的な広場を創出広場に対し、高層部をセットバックすることで圧迫感を軽減	居場所（P.35） <ul style="list-style-type: none">随所に点在するヒューマンスケールな居場所を創出グランドレベルのオープンテラスや周辺環境を見渡せるテラス等立体的に居場所を配置
			

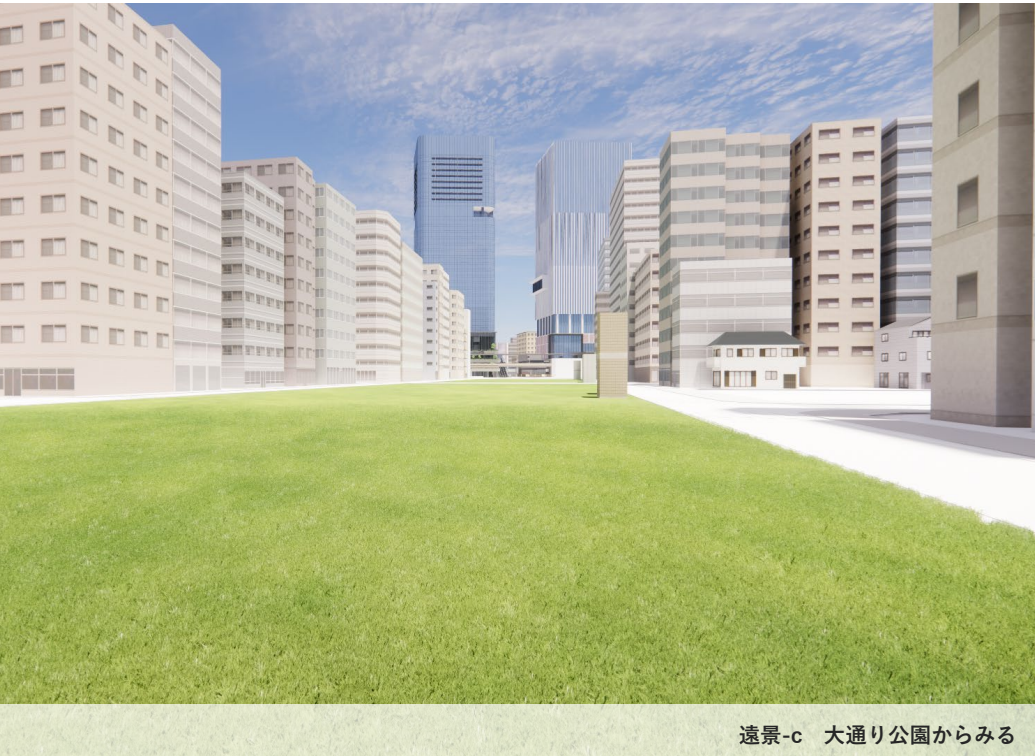
■透明感と柔らかい曲面で頂部を統一させた群像が都市再生を印象付ける新しいシンボルを形成



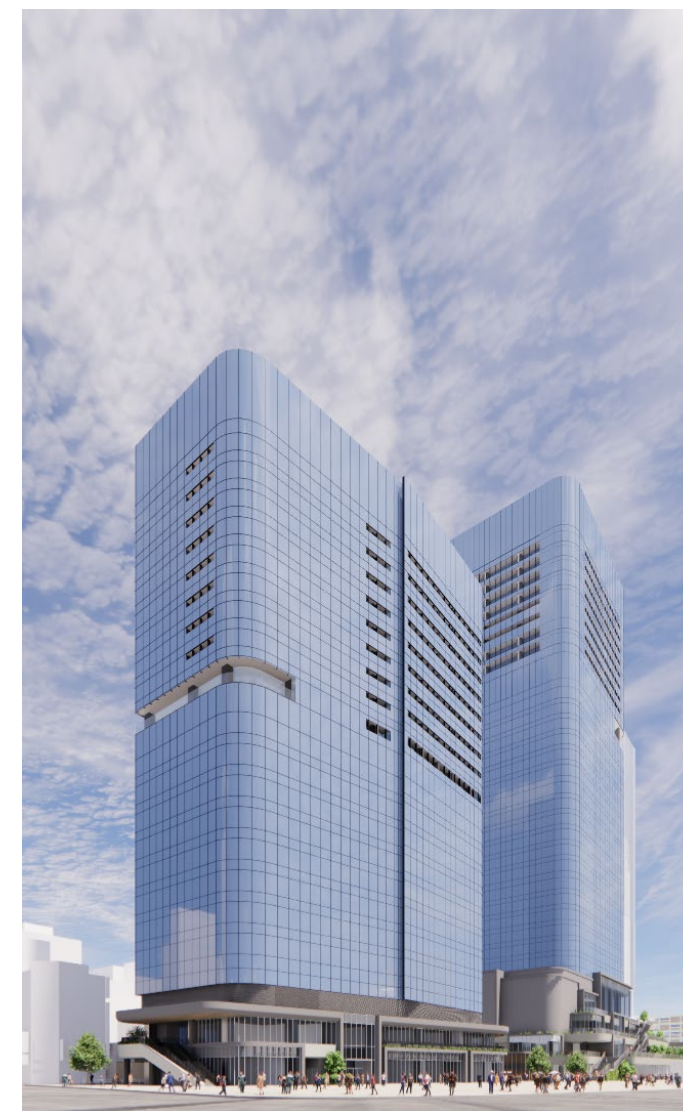
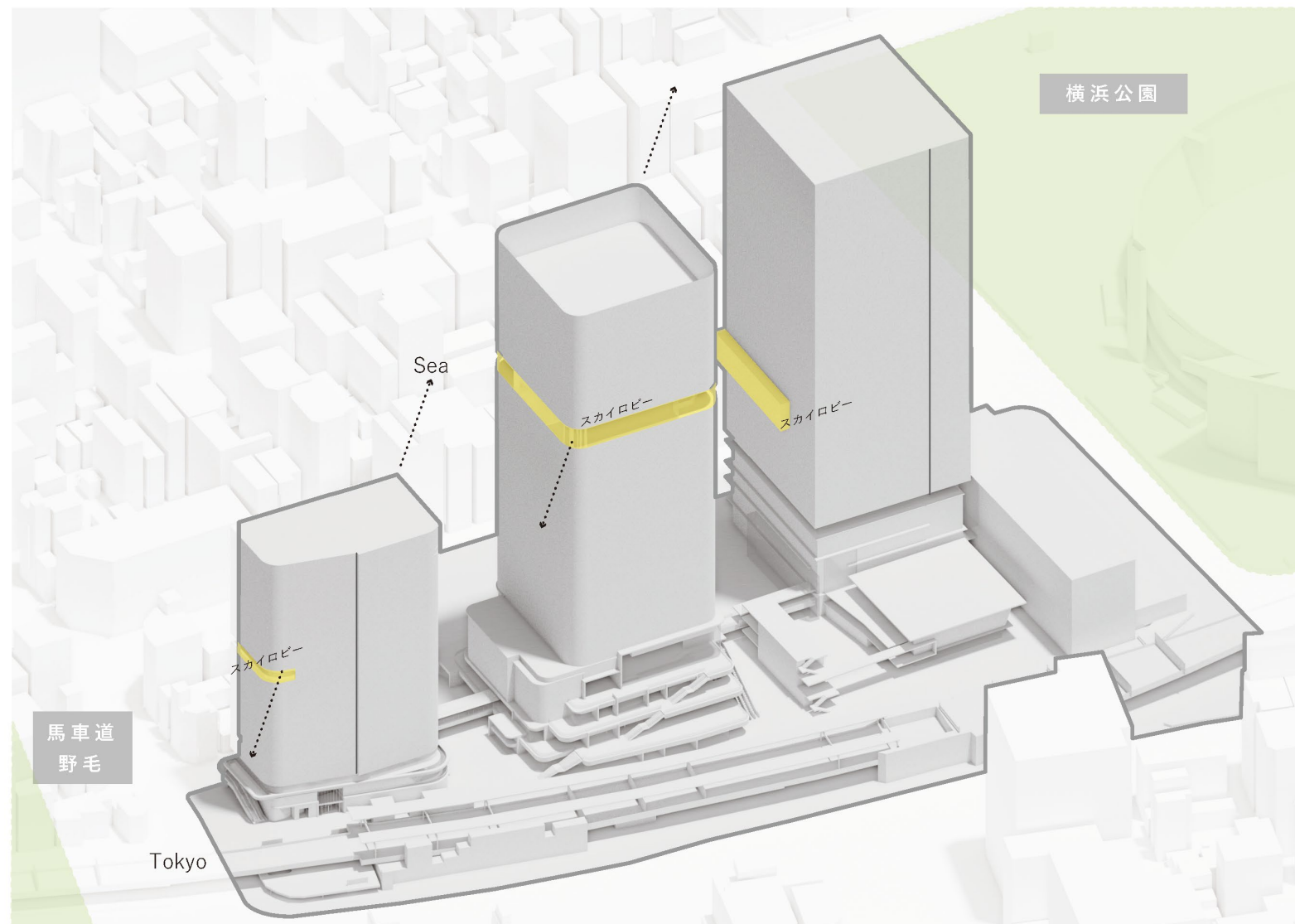
■3棟が一体に見える適正な配棟計画で周辺と調和



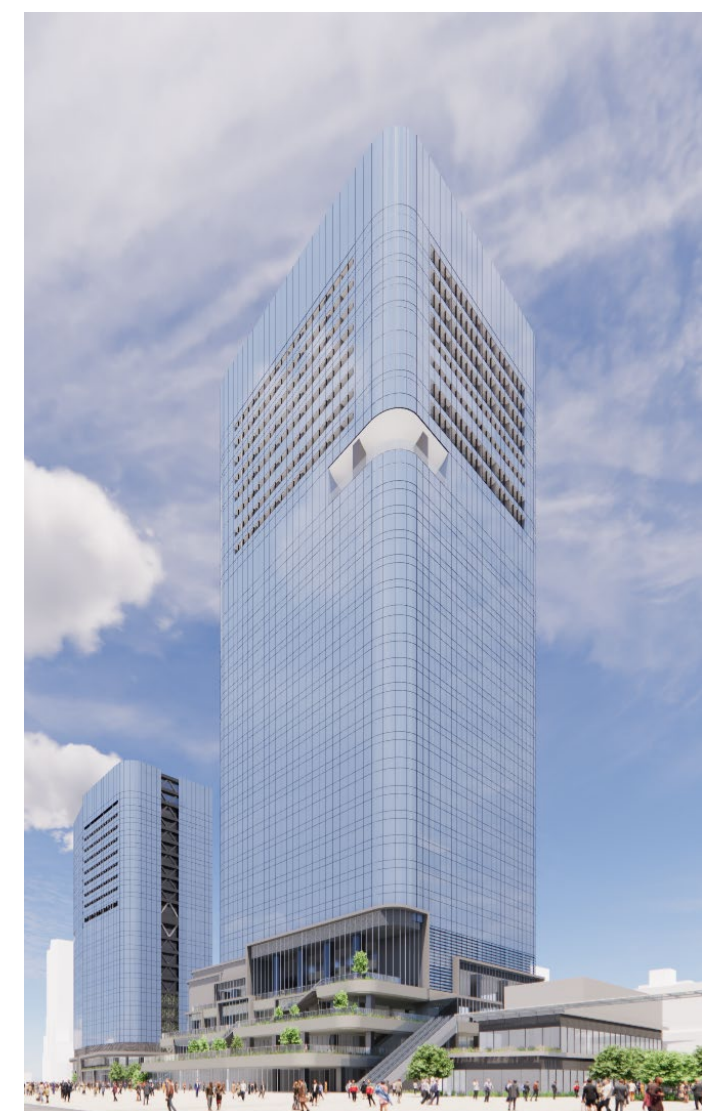
■開港の地・関所の地という歴史性から、2棟によるボリュームで関内に迎え受けるゲート性を創出



■3棟にアイキャッチとなるスカイロビーを設置し、関内特有の象徴性を創出



北口地区

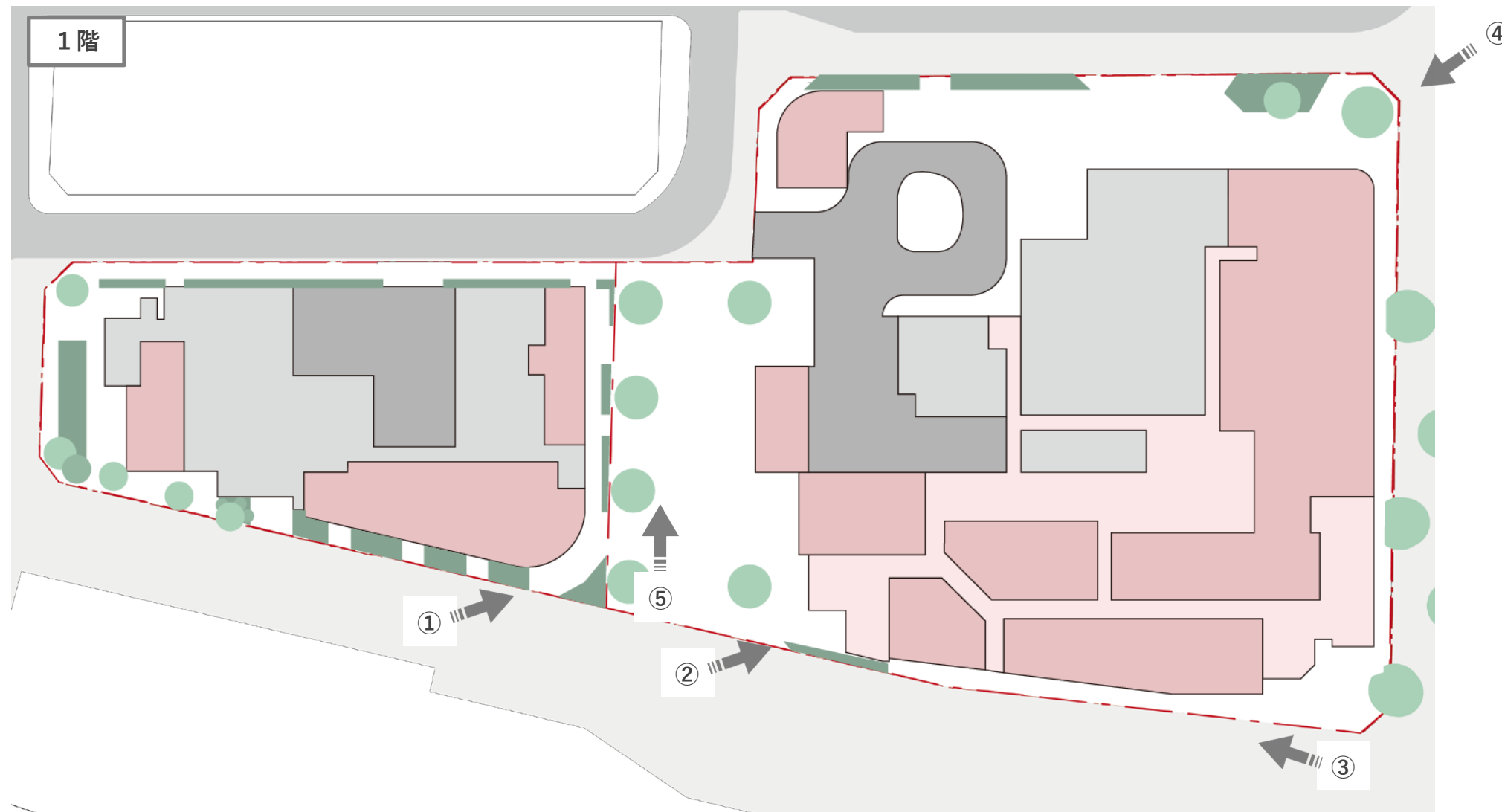


港町地区

11. 近景⑥：緑のあり方

横浜公園、関内桜通り、日本大通等の周辺のみどりと賑わいを繋ぐ拠点を形成

■関内に見られる豊かな緑を街区内に連続させながら、重層的に配置することで、緑の拠点を形成



関内の緑を引込み、立体的に配置



旧市庁舎街区側から港町地区に向かって



歩専道から広場に向かって



B C 広場から上階へ迎え入れる大階段



BC広場